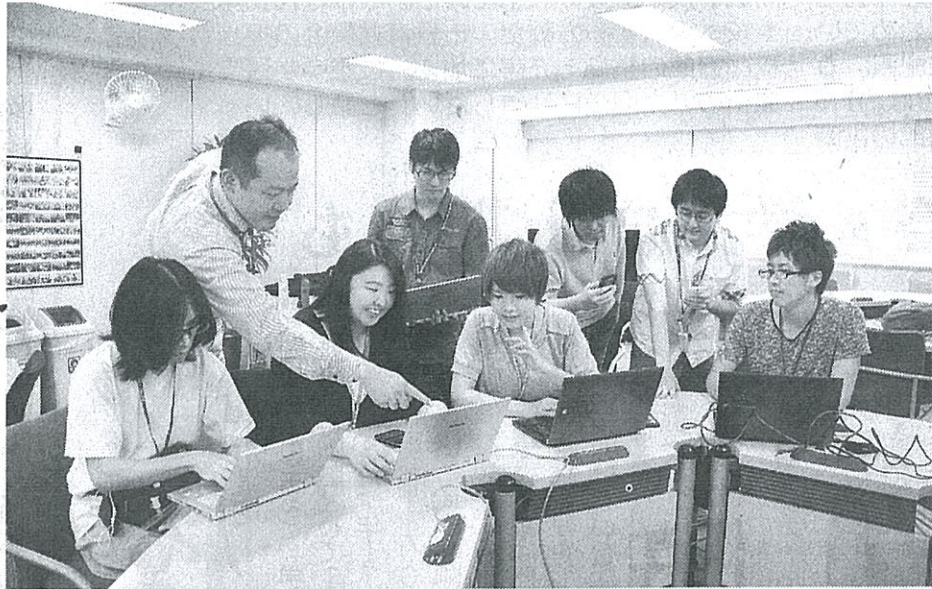


公的機関のアプリ開発

若い発想で運動促進

学生アイデアで、運動の習慣を。日々の生活に運動を取り入れることを目的に、県立体育センターなどが推進している「3033運動」のスマートフォン用アプリの開発に横浜市内の専門学校生が取り組んでいる。ゲーム感覚も取り入れ、楽しみながら自然に運動につながる内容で、完成後は一般公開される。公的機関が提供するスマホ用アプリを学生が手掛けることは、全国的にも珍しい。

(尹 貴淑)



製作中のアプリについて意見を出し合う学生＝横浜市神奈川区

開発に携わっているのは、システムエンジニアやプログラマーなどを目指し情報科学専門学校（同市神奈川区）と横浜医療情報専門学校（同市港北区）で学んでいる13人。同センターが両校と連携協力協定を結んだ昨年10月から、アンドロイド用のアプリ製作を始めた。

学生に開発を依頼したのは「モバイルツールの利用率が高い若い世代の柔軟な発想を、アプリに反映させる」（同センター）ことが狙い。アプリの機能や画面のデザインなど、製作は学生主導で行われている。一般公開を前提にしたアプリを作るのは今回が初めてだが、さまざまな課題を柔軟なひらめきで乗り越えてきた。

例えば、目的地まで大股で歩き、その歩数を数えるアプリ。スマホには歩数計のアプリがあるが、「大股」の幅は人それぞれ異なるため、どう測定すればいいかと壁にぶつかった。そのとき、学生が「身長から割り出す歩幅の平均値を応用して、大股を定義すればいい」と提案。問題を解決した。

目標を定め、達成できると画像が変化するといったゲーム的な要素も学生のアイデアで盛り込まれた。指導する情報科学専門学校の伊藤泰宏さん(37)は「大人だと、すでにある機能をどう活用して作るかを考えるが、学生はできるかできないかではなく、自由に考えている」と発想の豊かさを強調する。

アプリ開発を通じ、学生が得るものも大きい。本来なら社会に出てから経験する作業を一足先に体験できるからだ。横浜医療情報専門学校3年の笠原あや菜さん(20)は「授業では実際にアプリを作ることにはなかったもので、挑戦してみたかった。（技術面などで）対応できないことも、調べながら製作できている」と話す。

アプリは本年度中の一般公開が目標。公開後は、アンドロイド搭載のスマホで無料ダウンロードできる。